

著作権保護コンテンツ

2018年 第23回

翻訳絵本賞



『シャクルトンの大漂流』

作／ウィリアム・グリル
訳／千葉茂樹
2,310円 (岩波書店)
※2015年のケイト・グリーナウェイ賞とダブル受賞。

大賞

『わくせい
キャベジ動物図鑑』

作／tupera tupera
1,650円 (アリス館)



2021年 第26回

※大賞は該当なし

翻訳絵本賞

『虫ガール
ほんとうにあった
おはなし』

文／ソフィア・スペンサー、
マーガレット・マクナマラ
絵／ケラスコエット
訳／福本友美子
1,650円 (岩崎書店)

2017年 第22回

※翻訳絵本賞は該当なし



大賞

『きょうは
そらに まるいつき』

作／荒井良二
1,540円 (偕成社)

2019年 第24回

翻訳絵本賞

※読者賞とダブル受賞



『あめだま』

作／ベク・ヒナ
訳／長谷川義史
1,650円 (ブロンズ新社)

大賞



『もぐらはすごい』

作／アヤ井アキコ
1,650円 (アリス館)



2020年 第25回

※翻訳絵本賞は該当なし

大賞

『くろいの』

作／田中清代
1,540円 (偕成社)
※2019年の小学館児童出版文化賞とダブル受賞。



訳者の福本友美子さんより

ソフィアは虫が大好き。学校でいじめられ、悲しい思いをしますが、心配したママが昆虫学者にメールで助けを求めたため、世界中の虫好きから励ましのメッセージが届きます。実在のソフィアが11歳のときに書いた物語なので、ソフィアの気持ちに寄り添って訳しました。私は、子どもたちには何でも夢中になれることを見つけてほしいといつも願っていますが、この本は、子どもの背中を押してくれる1冊です。ママの行動も頼もしい！

1995年

翻訳絵本賞

『だれか、
そいつをつかまえろ！』

作／ピーター・アーマー
絵／アンドリユー・シャケット
訳／二宮由紀子
品切れ中 (BL出版)

大賞



『はやくねてよ』

作・絵／あきやまただし
1,430円 (岩崎書店)

2015年 第20回

翻訳絵本賞



『ヨハンナの電車のたび』

作／カトリーン・シェーラー
訳／松永美穂
1,650円 (西村書店)

大賞



『ふしぎなともだち』

作／たじまゆきひこ
1,650円 (くもん出版)

2016年 第21回

翻訳絵本賞



『まって』

作／アントワネット・ポーティス
訳／椎名かおる
1,430円 (あすなろ書房)

大賞

『30000このすいか』

作／あきびんご
1,430円 (くもん出版)



日本絵本賞

公益社団法人全国学校図書館協議会と毎日新聞社によって、1995年に設けられた賞。「絵本芸術の普及、絵本読書の振興、絵本出版の発展に寄与する」ことを目的とし、日本で出版された絵本を対象として、毎年、授賞作を選考しています。賞には「日本絵本賞大賞」「日本絵本賞」

「日本絵本賞翻訳絵本賞」のほか、一般読者の投票によって選ばれる「日本絵本賞読者賞」(山田養蜂場賞)があります。なお、78、92年には、全国学校図書館協議会と読売新聞社が主催した「絵本にっぽん賞」がありました。が、本賞はそれを引き継ぐ形で、95年に開始されました。

絵本作家、児童文学者、児童文学研究者など、
近代の日本の児童文学に携わった方の生年と没年を表にしました。
「この作家さんとあの作家さんは、同じ年」
「この作家さんとの作家さんは同年代を生きていたんだね」など、
年表から見えてくることがあります。

※2021年8月の時点で鬼籍に入られている方に限定しています。

1870	1880	1890	1900	1910	1920	1930	1940	1950	1960	1970	1980	1990	2000	2010	2020
巖谷小波 いわや・さざなみ 1870-1933年															
柳田國男 やなぎた・くにお 1875-1962年															
鈴木三重吉 すずき・みえきち 1882-1936年															
小川未明 おがわ・みめい 1882-1961年															
坪田譲治 つばた・じょうじ 1890-1982年															
村岡花子 むらおか・はなこ 1893-1968年															
浜田広介 はまだ・ひろすけ 1893-1973年															
武井武雄 たけい・たけお 1894-1983年															
宮沢賢治 みやざわ・けんじ 1896-1933年															
初山 滋 はつやま・しげる 1897-1973年															
八木重吉 やぎ・じゅうきち 1898-1927年															
関 敬吾 せき・けいご 1899-1990年															
										 『赤毛のアン』 著／モンゴメリ 訳／村岡花子 825円（新潮文庫）					
										 『赤い蠟燭と人魚』 文／小川未明 絵／酒井駒子 1,540円（偕成社）					
										 『九月姫とウグイス』 文／サマセット・モーム 絵／武井武雄 訳／光吉夏弥 990円（岩波書店）					
										 『ないた あかおに』 文／はまだひろすけ 絵／いけだたつお 1,100円（偕成社）					
										 『ききみみずさん』 文／木下順二 絵／初山 滋 880円（岩波書店）					
										 『セロピきのゴーシュ』 作／宮沢賢治 絵／茂田井 武 1,210円（福音館書店）					

[illegible]

絵本のある空間

いたばし ボローニャ絵本館

(東京都板橋区)

イタリアのボローニャから寄贈された
世界約100カ国70言語3万冊の絵本を所蔵する
『いたばしボローニャ絵本館』が、2021年3月に移転。
東京都板橋区の平和公園内の中央図書館に併設される形で
生まれ変わりました。

撮影／澤田和廣



①図書館は建物と平和公園の緑が調和したデザイン。②板張りのフロアには旧いたばしボローニャ子ども絵本館の蔵書が、絨毯張りのフロアには中央図書館の蔵書が配され、自由に行き来できます。③「世界を知る」と名づけられたコーナー。本の背表紙には、どの国の本なのかひと目でわかるよう、手づくりの国旗マークがついています。④子どもから大人まで、世界各国の絵本を気軽に手にとれる工夫がされています。

ご案内します

板橋区立中央図書館
館長 大橋 薫さん



「絵本のまち板橋」として
幅広い世代に絵本の魅力を発信

1981年に板橋区立美術館で「ボローニャ国際絵本原画展」を開催したことをきっかけに、ボローニャ市との交流がスタート。93年からは同市で毎年開催されているボローニャ児童図書展の事務局から海外絵本の寄贈が始まりました。2004年、それまでに寄贈された海外絵本をいつでも手にとれる施設として開館したのが、いたばしボローニャ絵本館です。板橋区立中央図書館の改築に伴い、館内の1階に併設移転しました。名称は、それまでの「いたばしボローニャ子ども絵本館」から、『いたばしボローニャ絵本館』へ。

「併設によって名称から『子ども』をとったのは、社会教育施設として、すべての世代に向けて、絵本の魅力を発信していきたいという思いからです」

そう話すのは、中央図書館の館長・大橋薫さんです。

板橋区では、区のブランド戦略として「絵本のまち板橋」と題したプロジェクトを展開。94年より実施している、英語とイタリア語の外国語絵本の翻訳コンテンツも取り組みのひとつです。

「外国絵本や文化にふれ、国際理解を育む機会を広い世代に届けたい。名称にはそんな思いをのせています」(大橋館長)

なじみのない言語の絵本も
手にとりやすい工夫

いたばしボローニャ絵本館を含めた中央図書館全体は「緑と文化」を象徴する図書館をコンセプトに、平和公園と一体化したつくりが特徴。世界約100カ国の絵本を置くいたばしボローニャ絵本館は1階中央にあり、そのシンボリック存在です。

「配架については、移転に伴い、イチから見直しをしました」

とは、図書館司書の笹岡智子さん。これまでボローニャから届く国別リストをもとに配架をしていたそうですが、近年は絵本もグローバル化が進んでいます。国別で分類することに意味があるのだろうか。そんな疑問から国別ではなく、原則として絵を描いた画家の名前をアルファベット順にして、配架することに。

「とはいえ、来館者のほとんどは日本語を母語とする方たちです。そこで、コーナーをたくさんつくり、なじみのない言語の絵本でも手にとっていただきやすいように工夫しました」(笹岡さん)

3万冊の絵本のラベルを職員全員で貼ることができるに費やした月日は約1年。「1冊1冊手にとり、話し合いを重ねて適したコーナーに配架したことは知識を深める機会にもなり、今後に生かせる蓄積ができたと思います」(笹岡さん)